(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2020-5566
(P2020-5566A)
(43)公開日　令和2年1月16日(2020.1.16)

(51)Int.Cl.		F I			テーマコード（参考）
A01G 9/029	(2018.01)	A01G	9/10	B	2B022
A01G 24/30	(2018.01)	A01G	1/00	303D	2B327

審査請求 未請求　請求項の数 4　ＯＬ　（全 7 頁）

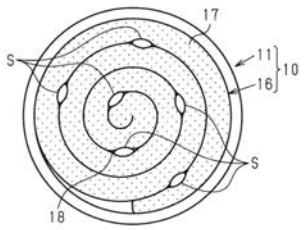
(21)出願番号　特願2018-129825 (P2018-129825)
(22)出願日　平成30年7月9日 (2018.7.9)

(71)出願人　396000422
リスパック株式会社
岐阜県岐阜市神田町九丁目２７番地
(74)代理人　100105957
弁理士　恩田　誠
(74)代理人　100068755
弁理士　恩田　博宣
(72)発明者　高橋　正浩
岐阜県岐阜市神田町九丁目２７番地　リスパック株式会社内

Ｆターム(参考)　2B022 AB20 BA22 BB02 BB10
2B327 NA10 NC05 NC25 NC39 NC41 ND01 QA02

(54)【発明の名称】植物育成体及び植物育成容器

(57)【要約】
【課題】多肉植物の種葉を育成する際に雑菌を入りにくくできる植物育成体及び植物育成容器を提供する。
【解決手段】植物育成体１６は、巻き重なるように渦巻き状に巻回され、前記巻回の隙間１８に多肉植物の種葉Ｓが栽植される、乾燥状態にある可撓性の多孔質マット１７を備えて構成される。
【選択図】図１



【特許請求の範囲】
【請求項１】
多肉植物の種葉が埋設状態で栽植される、乾燥状態にある可撓性の多孔質体を備えて構成された、植物育成体。
【請求項２】
巻き重なるように渦巻き状に巻回又は折り重なるように屏風状に屈曲され、前記巻回又は前記屈曲の隙間に多肉植物の種葉が栽植される、前記多孔質体としての多孔質マットを備えて構成された、請求項１に記載の植物育成体。
【請求項３】
ブロック状に成形加工され、その上面の穴又は切り込みに多肉植物の種葉が栽植される、前記多孔質体としての多孔質ブロックを備えて構成された、請求項１に記載の植物育成体。
【請求項４】
請求項１乃至３のいずれか一項に記載の植物育成体と、
前記植物育成体を収容する容器本体とを備えた、植物育成容器。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、植物育成体及び植物育成容器に関するものである。
【背景技術】
【０００２】
従来、植物を育成するためのマットとしては、例えば特許文献１に記載された植生マットが知られている。このマットは、植物の種子、茎、葉あるいは根のうちの少なくとも１種を散在させて植付させるというものである。なお、対象の植物として、セダム類やハーブ類、蘚苔類が列挙されている。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００３】
【特許文献１】特開２００３－１９９４２７号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００４】
ところで、特許文献１に記載のマットは、水分を含むことを前提に、雑菌の繁殖を抑制するための無機系抗菌剤が含有されている。このため、マットの製造工数の増大を余儀なくされている。一方、セダム類のような多肉植物の種葉を育成する場合には、マットが水分を含む必要性はないことから、雑菌が入りにくくなれば十分である。
【０００５】
本発明の目的は、多肉植物の種葉を育成する際に雑菌を入りにくくできる植物育成体及び植物育成容器を提供することにある。
【課題を解決するための手段】
【０００６】
上記課題を解決する植物育成体は、多肉植物の種葉が埋設状態で栽植される、乾燥状態にある可撓性の多孔質体を備えて構成される。
この構成によれば、前記多孔質体に前記多肉植物の種葉を埋設状態で栽植すれば、該多肉植物の種葉を育成できる。この場合、前記多孔質体が乾燥状態にあることで、前記多肉植物の種葉を育成する際に雑菌を入りにくくできる。
【０００７】
上記植物育成体について、巻き重なるように渦巻き状に巻回又は折り重なるように屏風状に屈曲され、前記巻回又は前記屈曲の隙間に多肉植物の種葉が栽植される、前記多孔質体としての多孔質マットを備えて構成されることが好ましい。

【０００８】
この構成によれば、前記多孔質マットの前記巻回又は前記屈曲の隙間に前記多肉植物の種葉を栽植すれば、該多肉植物の種葉を育成できる。この場合、前記多孔質マットが乾燥状態にあることで、前記多肉植物の種葉を育成する際に雑菌を入りにくくできる。
【０００９】
上記植物育成体について、ブロック状に成形加工され、その上面の穴又は切り込みに多肉植物の種葉が栽植される、前記多孔質体としての多孔質ブロックを備えて構成されることが好ましい。
【００１０】
この構成によれば、前記多孔質ブロックの前記穴又は前記切り込みに前記多肉植物の種葉を栽植すれば、該多肉植物の種葉を育成できる。この場合、前記多孔質ブロックが乾燥状態にあることで、前記多肉植物の種葉を育成する際に雑菌を入りにくくできる。
【００１１】
上記課題を解決する植物育成容器は、上記植物育成体と、前記植物育成体を収容する容器本体とを備える。
この構成によれば、前記植物育成体を前記多肉植物の種葉と共に前記容器本体に収容・固定することで、より円滑に流通させることができる。
【発明の効果】
【００１２】
本発明は、多肉植物の種葉を育成する際に雑菌を入りにくくできる効果がある。
【図面の簡単な説明】
【００１３】
【図１】植物育成体及び植物育成容器の一実施形態についてその構造を示す平面図。
【図２】同実施形態の植物育成体及び植物育成容器についてその構造を示す正面図。
【図３】植物育成体及び植物育成容器の変形形態についてその構造を示す平面図。
【図４】植物育成体の変形形態についてその構造を示す斜視図。
【発明を実施するための形態】
【００１４】
以下、植物育成体及び植物育成容器の一実施形態について説明する。
図１及び図２に示すように、植物育成容器１０は、容器本体１１と、植物育成体１６とを備える。
【００１５】
容器本体１１は、例えばシート成型で形成された合成樹脂（例えばＰＥＴ）にて有底略円錐台の筒状に成形されている。
植物育成体１６は、乾燥状態にある可撓性の多孔質マット１７を備える。多孔質マット１７は、例えばウレタン樹脂材（商品名：ＥＣＺ、株式会社イノアックコーポレーション製）からなる。植物育成体１６は、多孔質マット１７が巻き重なるように渦巻き状に巻回されることで構成されている。従って、多孔質マット１７は、密着する状態で渦巻き状に巻回されている。そして、この巻回の隙間１８には、多肉植物の種葉Ｓが栽植される。
【００１６】
種葉Ｓを栽植した植物育成体１６は、その外周面が容器本体１１に圧接するように該容器本体１１内に収容されることで、その周囲が保持されて巻回の姿勢を維持する。
なお、種葉Ｓは、その親株から切り取った切り口を上にして該切り口が上方に露出する状態で植物育成体１６に栽植される。これは、多肉植物の芽が出始める様子を視認できるようにするためである。
【００１７】
本実施形態の作用及び効果について説明する。
（１）本実施形態では、多孔質マット１７の巻回の隙間１８に多肉植物の種葉Ｓを栽植すれば、該多肉植物の種葉Ｓを育成できる。この場合、多孔質マット１７が乾燥状態にあることで、多肉植物の種葉Ｓを育成する際に雑菌を入りにくくできる。つまり、乾燥状態

にある多孔質マット１７の巻回の隙間１８に多肉植物の種葉Ｓを埋設状態で栽植するという極めて簡易な方法で抗菌性を付与できる。特に、ウレタン樹脂として抗菌剤を含有させたＥＣＺを採用したことで、多孔質マット１７自体に抗菌性を付与でき、更に菌を付きづらくできる。

【００１８】

（２）本実施形態では、植物育成体１６を多肉植物の種葉Ｓと共に容器本体１１に収容・固定することで、すぐに流通可能な状態になるなど、より円滑に流通させることができる。

【００１９】

特に、多肉植物は根の張りが弱く、流通途中で倒れたり、飛び出したりして不良品になる率が高かったが、植物育成体１６を多肉植物の種葉Ｓと共に容器本体１１に固定したことで、流通上で不良品になる率をより低減できる。

【００２０】

（３）本実施形態では、親株から切り取った種葉Ｓを植物育成体１６に栽植することで、種葉Ｓの切り口をそのまま乾燥させることができる。また、種葉Ｓの切り口の乾燥によって菌が付きづらくなることで、そのまま芽が出るのを待つことができる。つまり、親株から切り取った種葉Ｓをすぐに植物育成体１６に栽植しても、菌を付きづらくできる。例えば、親株から切り取った種葉Ｓを土の上に置いて芽が出るのを待つ場合のように、予め種葉Ｓの切り口を乾燥させて菌が付きづらくしておくといった手間を解消できる。

【００２１】

（４）本実施形態では、植物育成体１６に栽植した種葉Ｓをそのまま育成できるため、例えば土の上に置いた種葉Ｓのように、芽が出て根が張ったとしても、土が入った苗ポットまたは鉢に植え替える必要性を解消できる。

【００２２】

（５）本実施形態では、多肉植物の種葉Ｓの栽植に土を使用しないため、植物育成容器１０をより軽量、且つ、衛生的にできる。また、仮に植物育成容器１０をさかさまにしたり、横にしたりしても、土がこぼれて周りを汚すといったこともない。

【００２３】

（６）本実施形態では、種葉Ｓは、その親株から切り取った切り口を上にして植物育成体１６に栽植される。従って、切り口から新しく小さな芽が出る様子を生産者に限らず購入者でも鑑賞でき、また、その鑑賞期間もより長くできる。

【００２４】

（７）本実施形態では、多肉植物の親株から切り取った茎であってもその切り口を下にすれば植物育成体１６に栽植できる。このため、種葉Ｓと合わせたいろいろな寄せ植えが可能となる。つまり、多肉植物の親株から切り取った茎を切り口を下にして植物育成体１６に栽植することですぐに鑑賞できるとともに、多肉植物の親株から切り取った種葉Ｓを切り口を上にして植物育成体１６に栽植することで芽の出るときから鑑賞できる。

【００２５】

（８）本実施形態では、容器本体１１は上方に拡開していることで、該容器本体１１内に植物育成体１６を円滑に収容できる。

（９）本実施形態では、多孔質マット１７は、巻き重なるように渦巻き状に巻回されており、容器本体１１は、有底略円錐台の筒状に成形されている。単純に多孔質マット１７を渦巻き状に巻回すると、植物育成体１６は通常は略円柱形状を呈することで、有底略円錐台の筒状の容器本体１１内での植物育成体１６の収まりを簡易によくできる。

【００２６】

本実施形態は、以下のように変更して実施することができる。本実施形態及び以下の変更例は、技術的に矛盾しない範囲で互いに組み合わせて実施することができる。

・図３に示すように、多孔質マット１７が折り重なるように屏風状に屈曲されることで構成された植物育成体１６であってもよい。この場合、多肉植物の種葉Ｓは、この屈曲の隙間１８に栽植される。そして、植物育成体１６を収容等する容器本体１１は、植物育成

体１６の外周面に合わせて有底略四角錐台の筒状や四角筒状であってもよい。このように変更をしても前記実施形態（１）～（８）と同様の効果が得られる。特に、単純に多孔質マット１７を屏風状に屈曲すると、植物育成体１６は通常は略四角柱形状を呈することで、有底略四角錐台の筒状又は有底略四角筒状の容器本体１１内での植物育成体１６の収まりを簡易によくできる。

【００２７】

・図４に示すように、ブロック状に成形加工され、その上面の十字状の切り込み２８に多肉植物の種葉Ｓが栽植される、乾燥状態にある可撓性の多孔質ブロック２７で構成された植物育成体２６であってもよい。この構成によれば、多孔質ブロック２７の切り込み２８に多肉植物の種葉Ｓを栽植すれば、該多肉植物の種葉Ｓを育成できる。この場合、多孔質ブロック２７が乾燥状態にあることで、多肉植物の種葉Ｓを育成する際に雑菌を入りにくくできる。つまり、乾燥状態にある多孔質ブロック２７の切り込み２８に多肉植物の種葉Ｓを埋設状態で栽植するという極めて簡易な方法で抗菌性を付与できる。

【００２８】

なお、多肉植物の種葉は、十字状の切り込み２８に代えて、多孔質ブロック２７の上面の筋状の切込みや穴に栽植されてもよい。また、多孔質ブロック２７は、抗菌剤を含有させたウレタン樹脂製（例えばＥＣＺ）であってもよいし、抗菌剤を含有させていないウレタン樹脂製であってもよい。あるいは、多孔質ブロック２７は、ウレタン以外の合成樹脂製や天然スポンジ製などであってもよい。さらに、植物育成体２６は、容器本体１１に収容されていてもよい。

【００２９】

・前記実施形態において、多肉植物の種葉Ｓは、多孔質マット１７を巻回又は屈曲しながら栽植してもよいし、巻回又は屈曲後に栽植してもよい。

・前記実施形態において、植物育成体１６は、容器本体１１の底面に到達する高さ寸法であってもよいし、非到達の高さ寸法であってもよい。また、植物育成体１６が容器本体１１の底面に到達していない場合、その下方に適宜の台座を配置してもよい。

【００３０】

・前記実施形態において、容器本体１１は、有底略円筒状であってもよい。

・前記実施形態において、容器本体１１は、有底略多角錐台の筒状や多角筒状であってもよい。この場合、植物育成体１６は、容器本体１１の内壁面に合わせて多角形の渦巻き状に多孔質マット１７を巻回したものであってもよい。

【００３１】

・前記実施形態において、容器本体１１は、ＡＢＳ、ＡＥＳ、ＰＭＭＡ、ＰＣ、ＰＰ、ＰＥ、ＰＳ、ＰＶＣなどの合成樹脂製であってもよい。

・前記実施形態において、容器本体１１を省略して多肉植物の種葉Ｓと共に植物育成体１６を、例えば環状のホルダに嵌着するなど適宜の固定部材に固定してもよい。

【００３２】

・前記実施形態において、多孔質マット１７は、ＥＣＺ以外のウレタン樹脂製であってもよい。この場合、多孔質マット１７は、抗菌剤を含有させたウレタン樹脂製であってもよいし、抗菌剤を含有させていないウレタン樹脂製であってもよい。

【００３３】

・前記実施形態において、多孔質マット１７は、ウレタン以外の合成樹脂製や天然スポンジ製などであってもよい。

上記実施形態及び変更例から把握できる技術的思想について記載する。

【００３４】

（イ）上記植物育成容器において、

前記多孔質マットは、巻き重なるように渦巻き状に巻回されており、

前記容器本体は、有底略円錐台の筒状又は有底略円筒状に成形された、植物育成容器。

【００３５】

この構成によれば、単純に前記多孔質マットを渦巻き状に巻回すると、前記植物育成体

は通常は略円柱形状を呈することで、有底略円錐台の筒状又は有底略円筒状の前記容器本体内での前記植物育成体の収まりを簡易によくできる。

【００３６】

（ロ）上記植物育成容器において、

前記多孔質マットは、折り重なるように屏風状に屈曲されており、

前記容器本体は、有底略四角錐台の筒状又は有底略四角筒状に成形された、植物育成容器。

【００３７】

この構成によれば、単純に前記多孔質マットを屏風状に屈曲回すると、前記植物育成体は通常は略四角柱形状を呈することで、有底略四角錐台の筒状又は有底略四角筒状の前記容器本体内での前記植物育成体の収まりを簡易によくできる。

【００３８】

（ハ）上記植物育成容器において、

前記容器本体は上方に拡開している、植物育成容器。

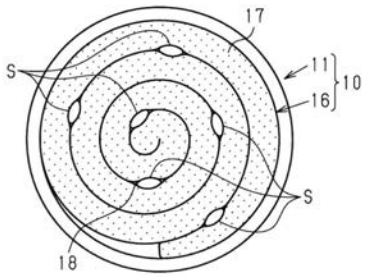
この構成によれば、前記容器本体は上方に拡開していることで、該容器本体内に前記植物育成体を円滑に収容できる。

【符号の説明】

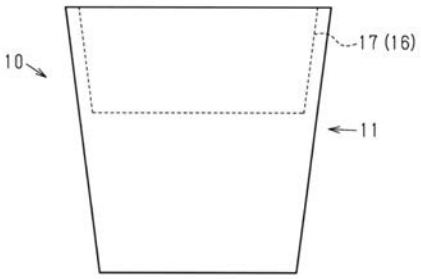
【００３９】

Ｓ…種葉、１０…植物育成容器、１１…容器本体、１６，２６…植物育成体、１７…多孔質マット（多孔質体）、１８…隙間、２７…多孔質ブロック（多孔質体）、２８…切り込み。

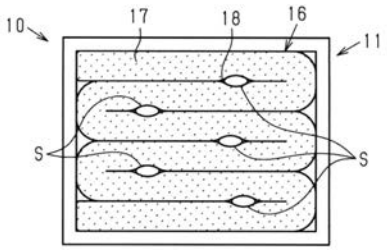
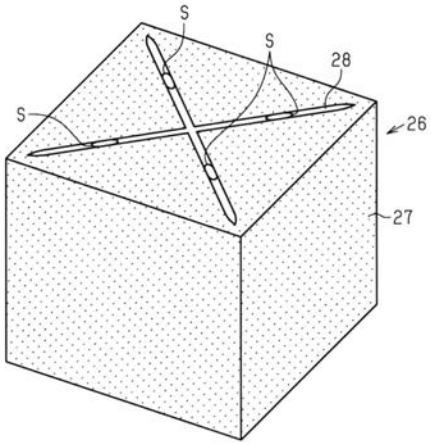
【図１】



【図２】



【図３】



【図４】